

学ぶ・教える・オースティン

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2018-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 実佳 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00025664">https://doi.org/10.14945/00025664</a>

# 学ぶ・教える・オースティン

鈴木実佳

[シェイクスピアの登場人物は単なる類型ではないということについて]  
…シェイクスピアを二度三度と読み直してみないとわからないことで、それも若い時には決してわからない。これまでシェイクスピアについていろいろ言われてきたことの中で、一番の名言は、ハックスレイ教授のものである。曰く、「シェイクスピアのよさは年をとらないと理解できない。」<sup>1</sup>

## To LEARN

1. To gain the knowledge or skill of
2. To teach [It is observable, that in many of the European languages the same word signifies to learn and to teach; to gain or impart knowledge]<sup>2</sup>

## 学ぶ

1. 知識や技量を得る
2. 教える [多くのヨーロッパで使用されている言語において「学ぶ」と「教える」は同じ語を使っている。知識を得る、または与える]

## 1) はじめに

ジェイン・オースティン (1775-1817) の小説では、教育、特に女性の教育が関心事になっていることは明白である<sup>3</sup>。ケリーは、そこで言う教育というのは今日の私たちが普通の意味で使っているような、学校教育で一般的に行われている知識や技術を身につけさせるという教育を含めるが、それだけでなく、教養ある個人として変貌する社会で有意義に生きていくための術の習得に関わる

<sup>1</sup> ラフカディオ・ハーン著作集 野中涼 野中恵子 訳 第11巻 東京：恒文社 1981, p. 228.

<sup>2</sup> Samuel Johnson, *A Dictionary of the English Language* (1983 [1755])

<sup>3</sup> D. D. Devlin, *Jane Austen and Education* (London: Macmillan, 1975).

ものであることを指摘している。なかでも、あるべき社会秩序を保持していくために女性が本当に果たすべき役割は何であるのかを問うスタンスをとっていると彼は述べる<sup>4</sup>。マクマスターは、「おおまかに言って、すべての小説で主題となっているのは教育である」とまずは指摘し、主人公の女性たちが経る経験は人生の学習過程であると述べ、その学習がどこでどのように行われ、何を得ているかを説明している。[[主人公たち]は皆、学習過程を経験する。自己を知り、自らの行動を判断して律する能力を得るといったことだ。…ジェイン・オースティンは常に知性、良識、洗練された趣味を重視していた。学習のなかでも最も重要な道德教育は、教室や教科書だけでなく、周囲の人々からの教えや手本、そして経験から得られるものである。]<sup>5</sup>

ジェイン・オースティン自身の教室での経験については、オックスフォード、サウサンプトン、レディングと、意外に地理的に広範囲を移動しているということ、7歳から11歳までの間（それもその間に発疹チフスに罹ったための療養期間も含んでいる）の短い経験であったことが知られている。一方で、父親が家で生徒をとって教えているという事情から、教育場面は日常的に身近なものであったということも思い出しておこう<sup>6</sup>。

本稿では、オースティンの作品のなかで学ぶこと、あるいは教えることがどれだけ言及されているかを具体的な語を挙げてその使用頻度を示し、主要な作品のなかで突出して学習関連の語が使われている『マンスフィールド・パーク』の例を細かくみていく。これは、教えを授ける立場と教えを受ける立場、その

<sup>4</sup> Gary Kelly, "Education and Accomplishments," in *Jane Austen in Context*, ed. Janet M. Todd (Cambridge: Cambridge University Press, 2005), pp. 252, 253.

<sup>5</sup> Juliet McMaster, 'Largely considered, education is a major theme in all the novels. Catherine, Marianne, Elizabeth, Emma, and Wentworth all go through a process of learning that involves the acquisition of self-knowledge and the ability to judge and regulate their behaviour... Jane Austen always valued intelligence, good sense, and developed taste. But in her novels the learning that matters most, the moral education, comes as much from the precepts and examples of the surrounding characters, and from experience, as from the schoolroom and the textbook'

'Education', in J. David Grey, ed. *The Jane Austen Handbook* (London: Athlone, 1986), p. 142.

<sup>6</sup> 1783年ジェイン7歳の春のことである。姉カサンドラ（10歳）、従姉妹ジェイン・クーパー（12歳）と共に、オックスフォードのコーリー夫人（Mrs Cawley）のもとで学んだ。1783年夏、コーリー夫人は皆をつれてサウサンプトンへ赴いた。そこでは発疹チフス（軍隊によりもちこまれ、広まったと言われている）が流行しており、カサンドラもジェインも具合が悪くなり、オースティン夫人とクーパー夫人が迎えに行った。翌々年1785年春、ジェインとカサンドラは、レディングの学校に行くが、1786年12月学校をあとにした。William Austen-Leigh, Richard Arthur Austen-Leigh, and Deirdre Le Faye, *Jane Austen: A Family Record*, Rev. and enlarged (London: British Library, 1989 [1993 [printing]]), pp. 44, 45, 47

逆転の可能性（ジョンソンによれば、そもそも学ぶことと教えることは同じ語で表される）の物語である。あるいは信念をもつことと共に、そこから発した咎を認めて自らの過ちを正すべく学ぶことの重要性と幸福感が結びつけられていることにも注目しよう。

## 2) オースティンの作品での教えること、学ぶこと

オースティン作品の優秀さを、その語りの技術に帰する場合、読者を主人公の女性の主観に同化させることと、登場人物を対象化した語り手の「公平な」俯瞰的立場とを同時に読書の世界に実現させていると考えられることがある。一体化と対象化を並行させられるのである。その点からすると、教材としてオースティン文学を読み学ぶ学生としては、作品の中で登場人物たちがどのように何を学んでいるのか読むことは非常に大切な体験となる。

「今、この時に至るまで、私は私というものを知らなかったのだわ」(Till this moment I never knew myself.) という台詞があまりにも印象的であるので、与えられた素材を熟考し、その過程で自らの無知と過ちを認め、悟り、我を知るという学習を経る主人公の代表は、『高慢と偏見』のエリザベス・ベネットであるようにも思われる<sup>7</sup>。これは、求婚を拒絶した後で渡されたダーシーの手紙を読み、自らの判断と行動を振り返り、自分の賢さに関する自負ゆえに、あるいは自分は事情を把握していて正当な判断をすることができるという虚栄心のために、実際には現実が見えていなかったことを悟る場面である。この場面でエリザベスは、知を得るだけでなく、自分が状況を適切に認識しない状態から、認識している状態に変化したという自己の習得に関する価値判断を行うことができるようになっていく。それまでの自分の状態について、情報を欠く、あるいは情報は目前にあってもそれを見ることができない、あるいは曲解するという適切な判断力を発揮しない状況になっていたことを表す「盲目」「偏った認識による愛着」「偏った認識による嫌悪」「馬鹿げている」「不信」「愚かさ」「先入観」「無知」(blind, partial, prejudiced, absurd, mistrust, folly, prepossession, ignorance) といった語が使われ、自分が持っているように錯覚していたが実は持っていなかったものについては、「能力」「判断力」「理性」「相手を受容れ、隠し立てをしない率直さ」(abilities, discernment, reason, candour) である。彼女は自分の誤

<sup>7</sup> Jane Austen, *Pride and Prejudice*, ed. Pat Rogers (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), p. 230.

解を「恥じ」(grew absolutely ashamed of herself)、自分とものごとの間に存在した壁を取り払い、あるいは曇りを振り払って、現実に関する新たな認識を得て、そして自分を「発見」し、「我を知る」(discovery, knew myself)<sup>8</sup>。

その『高慢と偏見』を含めたオースティン作品における学習関連の語の使われ方について検討してみよう。

### 学ぶ、教わる in Jane Austen

	L&F	S&S	P&P	MP	Emma	NA	Persuasion	Evelina	Jane Eyre
learn	5	22	28	47	13	29	20	11	46
teach	1	2	7	13	11	4	1	8	68
taught	2	4	8	13	7	7	2	5	12
academ-	0	0	0	0	0	0	0	0	0
educat-	8	10	14	24	21	1	8	24	20
lesson	1	1	2	8	4	2	3	3	19
school	2	6	2	11	14	2	15	7	121

この表は、オースティン作品 *Love and Freindship* (L&F), *Sense and Sensibility* (1811)(S&S), *Pride and Prejudice* (1813)(P&P), *Mansfield Park* (1814)(MP), *Emma* (1815)(Emma), *Northanger Abbey* (1817)(NA), *Persuasion* (1817)(Persuasion) において、学ぶ (learn, learning, learned, learnt)、教える (teach, teaching, taught)、学術的 (academy, academic など academ-)、教える (educate, educated, education など educat-)、教え・教訓 (lesson)、学校 (school) が現れる数を数えたものである。参考までに、比較の対象として、同時代に活躍したバーニー (Fanny Burney, 1752-1840) の『エヴリナ』(*Evelina*, 1778)、19世紀半ばのブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-1855) の『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847) において同じように数えた数を挙げてある<sup>9</sup>。

<sup>8</sup> Austen, *P&P*, p. 230. この重要な場面では、表の作成のために抽出した語は使われていないという点にも注意しておこう。

<sup>9</sup> ここに挙げた数は、教えることにおいて素人である鈴木が作業したもので、正確な数字であるという保証はなく、傾向を知るための参考である。

表から読み取ることができるもののうち、以下について注目しておこう。オースティン作品は、一般的に、「教える」よりも圧倒的に「学ぶ」人々の物語であることがわかる。「教育を主題とする」のであるが、自己を教育する、知識を得る、学ぶということに重点がある。これは、小説を大学の教室で読み、それがその後の人生のなかで意味をもつことを願う立場からすると、たいへん好都合な数字である。教室で教わったことが年を重ねるうちに自ら学ぶ契機になっていくということだ。ただし、表の数字によれば、「学術的」なことには直接的には関連していかない。

作品別に見ると、『マンスフィールド・パーク』が学ぶことに顕著に関心を示している。この作品に関する評価からまず関連する点を挙げ、この作品の大学の授業のなかでの可能性について考えてみよう。単に辛気くさい説教じみた傾向を示すだけでなく、教員にとって恵みの物語になっているからである。

### 3) 『マンスフィールド・パーク』

オースティンにしては珍しくお説教くさく、道徳的で「珍しく無個性な少女を主人公と」していると一般読者の間では評されることのある『マンスフィールド・パーク』は、オースティンの小説のなかで、評価の幅が最も大きいかもしれない<sup>10</sup>。それは、C.S. ルイス (1898-1963) には、「清廉潔白以外の何もかも注ぎ込まれていない」面白みのない主人公をもつという有難くない評価をされた<sup>11</sup>。一方、面白みのない停滞の裏には活発なダイナミクスが実は働いているという指摘もある。エドワーズによれば、これは「ヘンリーがファニーに近づき、自分の思うように彼女を変えていこうとするのにたいして、ファニーは自分のアイデンティティを保とうとする」物語であり、両者の力のせめぎあいのお話である。静的にみえるファニーは、強烈なヘンリーの攻撃に耐えた上で落ち着きを保っているのである<sup>12</sup>。また、清廉潔白を描くとは言っても、その描き方が秀逸であることをテイヴは指摘している。礼節を描いているのは事実であるが、単に自己肯定的に礼節にしがみついている人々を嘲笑し、実は静かに

---

<sup>10</sup> マンスフィールド・パーク、日本語版ウィキペディア作品解説 2018年5月31日

<sup>11</sup> Harold Bloom, ed. *Jane Austen's Mansfield Park* (New York: Chelsea House Publishers, 1987), p. 3.

<sup>12</sup> Thomas Edwards, "The Difficult Beauty of Mansfield Park" in *Jane Austen's Mansfield Park*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1987), pp. 14-5.

達成している人を称賛しているというのだ<sup>13</sup>。このように、強い作用と反作用の力の拮抗のうえに成り立っている静かな均衡であることを見いだすのが学術の世界では主流になって久しいのかもしれない。モーガンを借りてまとめるとすると、「ファニーは自分の周囲に起こっていることを理解することができ、理性を使って、他人への思いやりを発揮し、しかも自分を見失わずに変化することができる」<sup>14</sup>。

改めて『マンスフィールド・パーク』を授業を行う立場をとって読み直してみると、学生たちが大学時代に読み、そして何年も経ってから読み直すのに適した要素が実はみつかる。それは、教えることを当然の責務であると認識した側と教わる側に立っていた人の関係が、年月が経ってみると、教わる側であった人の成長と、教える側だった人の柔軟性によって、変化するからである。それでは、小説としての楽しみから少し逸脱して、教わる、学ぶという点に注目して作品を詳細に読んでみよう。

主人公ファニー・プライスは、二人の叔母をもっている。裕福なサー・トマス・バートラムと結婚し、優雅にソファに横たわり、愛玩犬をなでているのこそが自分の仕事であるかのような生活を送っているレイディ・バートラムと、牧師に嫁いだが夫に先立たれて、遣り場を失った自分のエネルギーを向ける場をバートラム家に求めて、何かと口出しをせずにはいられない狭量なノリス夫人である<sup>15</sup>。ただ、ノリス夫人は、結果的にファニーがバートラム家で暮らすようになるきっかけをつくるという大切な役割を果たす。そこで彼女が主張するのは、小賢しい金勘定である。彼女によれば、「女の子を教育し、適切に世に送り出し、自立することができるようにはからうことによって、さらなる出費が抑えられ、誰もが助かる。」<sup>16</sup>彼女のような人物にとって、教育は後の出費を抑えるための小さな投資である。

バートラム家の主人、サー・トマスにとっては、無謀とも言える結婚をして生活に窮している家の長女ファニー・プライス（妻の妹の娘）の養育を引き受

<sup>13</sup> Stuart Tave, "Propriety and Lover's Vows," in *Jane Austen's Mansfield Park*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1987), pp. 37-8.

<sup>14</sup> Susan Morgan, "The Promise of Mansfield Park," in *Jane Austen's Mansfield Park*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1987), p. 81.

<sup>15</sup> J.K.Rowlingは、 hogwartsの生徒の規則違反を摘発するのを無上の喜びとする陰湿な学校管理人フィルチが飼っている猫の名を「ノリス夫人」とし、この猫は生徒に歓迎されないところで不思議と居合わせる底意地の悪い手下である。

<sup>16</sup> Jane Austen, *Mansfield Park* (Cambridge: Cambridge University-Press, 2005), p. 7. 以下で特に指定のない限り、Austenとして示すのはこの作品とする。

けることは、恵まれた親戚の義務である。彼はまた、プライス家の息子達の教育及びその後の身の処し方についても、たいへん配慮して救いの手を差し延べていた<sup>17</sup>。プライス家の長女ファニーは、パートラム家で生活することにより、同年代の二人の従姉妹（サー・トマスの子であるマリヤとジュリア）と共に時を過ごし、彼女らにつけている先生の教えを受けることもできる<sup>18</sup>。彼にとって貧乏人は、「無知蒙昧で賤しい考えをもち、低俗で大いに迷惑」な存在である。しかし彼の認識では、こうした貧乏人の落ち度を矯正する力をもっているのが教育である。また、彼のもとで育っている娘たちは、堅固な教育を受けているので、そのような劣悪な人間を側におくことになっても、それに染まることはないと考えている<sup>19</sup>。すかさずノリス夫人は、サー・トマスの子どもたちと一緒にいるだけでも（家庭教師が何も教えないとしても）、良い見本を示すので、ファニーにとっては良い勉強になるとおべっかを放つ<sup>20</sup>。貧乏人に関する先入観と、自分の娘たちについての信頼は、やがて裏切られていくことになる。

マリヤとジュリアの教育の何が間違っていたのか、小説の序盤で既に指摘されている。彼女たちは、小さな頃から十分に知識を授けられ、それを吸収する能力にも恵まれて、豊かな知識を備えていた。彼女たちが持つことにならなかったのは、「自己認識、寛大さ、謙虚さ」である。娘たちの人格の大切な部分の形成が失敗していることに、この教育熱心な父親は気づいていなかった。父親は、その厳格な存在によって娘たちの自己表現を封じ、親子は互いに理解しあっていなかったというのが、父親の教育への信頼及び彼の真面目な取り組みと、その良き結果たるべきであった娘たちの行動との間を結びつける説明として提供されている<sup>21</sup>。

父親が、自分の娘たちやファニーを理解するのには、時間と試練を要することになるが、早くからファニーを理解し、ファニーの人格的教育に大きな役割を果たすのが、パートラム家の次男エドモンドである。彼は、イートン校を出て、オックスフォード大学に進み、牧師になるべく研鑽している。ファニーはフランス語を家庭教師に教わり、歴史の本を読むのを聞いてもらうのもその家庭教師であったが、読書の習慣と好みはエドモンドの導きで身につけていく。本を通じて、エドモンドは理解力のある子に教える喜びを、ファニーは導かれ

<sup>17</sup> Austen, p. 23.

<sup>18</sup> Austen, p. 10.

<sup>19</sup> Austen, p. 11.

<sup>20</sup> Austen, p. 11.

<sup>21</sup> Austen, p. 21.



る喜びを味わっていた。

エドモンドには彼女が頭が良く、良識をもち、のみこみが早いこと、そして読書が好きであることがわかっていて、読書は適切に方向性を与えてやれば、それ自体が教育である。…彼が薦めてくれた本を彼女は暇な時間に喜んで読み、彼は彼女の趣味を褒め、彼女の判断を正した。彼女が読む本のことを彼が話題にしてくれるので、読書は有益なものとなり、正鵠を得た称賛をしてくれるので、読書はさらに魅力のあるものになった<sup>22</sup>。

ファニーは着実に学習して、人間として成長しているが、教えを授けてもらう側にある人間であって、他に働きかける能動的な役割を果たす資格はないと自分では感じている。恋しているエドモンドは相談相手を求める。「考えは邪悪ではないのだけれど、邪悪なことを口にする人で、ふざけて口にする。ふざけていると知っていても私としては心底嘆かわしい」と言って、メアリ・クロウフォードを弁護しつつ、彼が彼女の何に困っているのかを明らかにする。これにたいして、ファニーが「教育の影響なのでしょう」と言うと、彼は同意せざるを得ず、もともとは「最高の人」の表面上だけでなく、人格の根幹を劣悪な教育が冒しているのではないかと危惧する。彼から習うばかりであったファニーは、スタンスの変化を求められるが、彼女は困惑して、学習する側の立場から脱する資格がないとの自覚を述べる。ファニーは、「聞いていればよいのなら、できる限りお役にたきたいけれども、アドバイスをしてなんて言わないで。そんな能力はもちあわせていないから。」<sup>23</sup>

ファニーの達成は、彼女を家族以外の大勢に公開して是認してもらうことで、つまり外部評価を受けることで明確化される。人々が集まる社交の場でのファニーをみて、サー・トマスは彼女の向上と成長を認め、大いに満足する。彼が提供した教育の成果を目にしているのである。他人に見せる成果としてファニーは到達点に達した。サー・トマスは与える立場の満足感を確認し、ファニーは「発表会」のようなものをうまくこなして、教育を享受する者の務めを果たしている。

<sup>22</sup> Austen, pp. 24-5.

<sup>23</sup> Austen, pp. 312.

彼は姪を誇らしく思っていた。ノリス夫人は、彼女の身のこなしの美しさをバートラム家にやってきたせいだと思っているようだったが、彼はそれ以外に教育も礼儀作法も彼が与えたのだと思って、悦に入っていた<sup>24</sup>。

次に、エドモンドはファニーが人を変えていく力をもつと評価していることを示す。彼女が他に働きかけて、教育を施す側になることができると判断しているのである。これは、ヘンリーの求婚を受けるように、エドモンドがファニーを説得する場面である。ここでも叔父叔母が授けた教育のせいで、ヘンリーは道を誤っているが、矯正可能と彼は考える<sup>25</sup>。「彼はあなたを幸せにするだろうと思っている。あなたは彼を何にでもできるだろう。」<sup>26</sup>ファニーは、「そのように高度な責任を伴う任務」を引き受けることはできないと言って、この提案を却下する<sup>27</sup>。エドモンドは、「例によって、何であっても自分の能力が足りないと信じているのでしょうか。何でも自分にとっては荷が重すぎると思うのは空想じゃないかな!」と指摘する<sup>28</sup>。それに対し、ここでは、能力の欠如ではなく、責任を負う意志があるかどうかをファニーは問題にしている。誰に対する責任なら負っても良いと思うことができるか。妹である。

スーザンを得ることはファニーにとって非常に大事である。ファニーは、自分の家族の中での年齢の上下関係を利用することにより、始めて、人の状況を判断し、評価し、指導する立場に自分をおくことができる。ファニーの母親は、子どもを教育する能力を欠いていて、一家の中は混沌としている<sup>29</sup>。ファニーはそれを目の当たりにして、自分が影響力を及ぼすにあたり、「資格がないとも、その意志がない」とも考えず、自分が貢献する場としてみることができる<sup>30</sup>。ファニーの目からみて、妹スーザンは欠点だらけである。「彼女の物腰は間違っていた。時には非常に間違っていた。間違った手段を間違った時に選び、表情と言葉使いはしばしば弁解の余地なしだった。」<sup>31</sup>それでもファニーはスーザン

<sup>24</sup> Austen, p. 321.

<sup>25</sup> ヘンリーに関する評価を検討する場面では、朗読が上手いという事実が指摘される。例えばGary Kelly, "Reading Aloud in *Mansfield Park*," in *Jane Austen*, ed. Harold Bloom, *Modern Critical Views* (New York: Chelsea House Publishers, 1986), pp. 129-46参照。

<sup>26</sup> Austen, p. 406.

<sup>27</sup> Austen, p. 406.

<sup>28</sup> Austen, p. 406.

<sup>29</sup> Austen, p. 451.

<sup>30</sup> Austen, p. 452.

<sup>31</sup> Austen, p. 458.

を教育することが可能であると考え。「誰かを導き、教えることができると想像してみる」などやってみたことがなかったが、新たに、自分には可能であると想像してやることができるようになっていく<sup>32</sup>。

ファニーが教育の能力と意志をもって、人生の教師としての立場を獲得していくのとは反対に、サー・トマスは意志と威厳に満ちた自信満々の、与える側の自負を維持することができない。ファニーについては、彼は比較的早くからその性格を理解し、どう対処するのが適切であるか判断することができている。彼女がヘンリーの求婚を受け入れない際に、彼は彼女を叱りつけない。「彼女の性格からいって、働きかけるのに最善の方法は親切にすることだと彼は信じていた」ので、説得をエドモンドに依頼したり、大好きな弟や家族を訪問できるように計らったりする<sup>33</sup>。自分の娘たちについては彼はこのような理解を示さないまま、娘たちが彼の信頼を裏切っていることを認識していく。マライアの件で最も苦しむのは彼である。それも、彼女の愚行を責めるのではなく、自分の過ちを自覚して、その自責の念で苦しむ。「サー・トマス、かわいそうなサー・トマスは、親としての自分の行いの過ちを自覚し、最も長く苦しむことになる。」<sup>34</sup>彼は状況にある程度対応するのであるが、「娘の教育を誤ったという自覚から生ずる苦悶はすっかり消えてしまうことはなかった。」<sup>35</sup>その失敗について彼は打ちのめされている。ノリス夫人という若い娘を甘やかし、煽てる叔母が娘たちの欠点を助長したという面もあるが、それは副次的であって、彼が行った教育そのものに問題があったと彼は認識する。彼はここで、優雅な振舞や技芸といった表面に現れる人間の行動と、それを司る根本原理に分けて考えた上で、「行動原理」あるいは宗教的「義務感」が、欲望を律するべく積極的な働きかけをするように導くことが教育であると考え。欠けていたものを考えるにあたり言及される「道徳原理」(principle)は、'principle, active principle'と、わざわざ'active'を加えて言い直して、人生を動かす能動的でダイナミックな役割を果たす信念であることが確認される<sup>36</sup>。日常生活の実践は道徳原理によってダイナミックに動かされているべきなのである。彼の娘たちにとって、信念

<sup>32</sup> Austen, p. 458.

<sup>33</sup> Austen, p. 380.

<sup>34</sup> Austen, p. 533.

<sup>35</sup> Austen, p. 535.

<sup>36</sup> Austen, pp. 535-36. 'principle'は、ウィルトシャーが序で指摘しているように、小説の(長い)第1パラグラフで早くも登場するキーワードであり、キリスト教徒としての基本的な原理である。Austen, pp. lii-liv, 641.

と実践は結びつきをもたなかった。その認識は苦いものであるが、彼にはそれを受容れる度量がある。お金をかけ、熱意をもって行った教育がもたらしたものは、娘たちの側では「重要な義務を理解しないこと」であり、彼の側では「娘たちの性格と気性を知らない」ということであつた<sup>37</sup>。教育の失敗による双方の欠如を彼は自分の過失として認める。

そして、サー・トマスにとって想定していなかった事態となり、その変化を受け入れ、そこから学ぶことになる。彼の善き行いとしての教育の提供は、それ自体が喜びであつたが、息子の婚姻により彼はファニーという娘を得ることになり、彼の喪失感は埋め合わせを得ることになった。ノリス夫人は、教育の提供を後の負担の回避として正当化しようとしたが、サー・トマスの損得勘定から自由な行いは、「豊かな報酬」をもたらし、彼の善意はこのような「報酬」を得るに「値した」<sup>38</sup>。

#### 4) おわりに

冒頭に引いたジョンソンの定義のように、学ぶこと、教えること、教育することは、知識・情報・技術などをやりとりして、思考の動きを活発化させて、人格に変化をもたらすことである。ハックスレーやラフカディオ・ハーンがシェイクスピア作品について言ったように、オースティン作品も面白いと思うことができるまでには人は年齢を重ねなくてはならないかもしれない。オースティンは、主人公の女性たちを自ら気づき、学ぶ人々として描いたのであり、それを読む端緒を与えることを目標にすれば、あとは学生たちが自分で学んでいてくれるはずである。また、教える側は、サー・トマスのように学ぶ側になることもできる。そこで、教員は、「幸福がやってくるという希望をもつことそれ自体の幸福」にひたることにしよう<sup>39</sup>。ただし、もちろんこれは、根拠のない空想によってもたされる希望であっても、その影響下にすすんではいるダッシュウッド夫人を描写したフレーズであるということを認識したうえで、その幸福感をもってしよう。ダッシュウッド夫人は結局は、彼女が切に望んだように、娘たちが幸福に結婚するのを見ることができるのであるから。

<sup>37</sup> Austen, p. 536.

<sup>38</sup> Austen, p. 546.

<sup>39</sup> Jane Austen, *Sense and Sensibility*, ed. Edward Copeland (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), p. 9.

- Austen-Leigh, William, Richard Arthur Austen-Leigh, and Deirdre Le Faye. *Jane Austen : A Family Record*. Rev. and enlarged / by Deirdre Le Faye. ed.: London : British Library, 1989 (1993 [printing]).
- Austen, Jane. *Mansfield Park*. Edited by John Wiltshire. Cambridge: Cambridge University Press, 2005.
- . *Pride and Prejudice*. Edited by Pat Rogers Cambridge: Cambridge University Press, 2006.
- . *Sense and Sensibility*. Edited by Edward Copeland Cambridge: Cambridge University Press, 2006.
- Bloom, Harold, ed. *Jane Austen's Mansfield Park*. New York: Chelsea House Publishers, 1987.
- Devlin, D. D. *Jane Austen and Education*. London: Macmillan, 1975.
- Edwards, Thomas. "The Difficult Beauty of Mansfield Park". In *Jane Austen's Mansfield Park*, edited by Harold Bloom. 7-21. New York: Chelsea House Publishers, 1987.
- Grey, J. David, ed. *The Jane Austen Handbook*. London: Athlone, 1986.
- Kelly, Gary. "Education and Accomplishments." In *Jane Austen in Context*, edited by Janet M. Todd. 252-61. Cambridge: Cambridge University Press, 2005.
- . "Reading Aloud in *Mansfield Park*." In *Jane Austen*, edited by Harold Bloom. *Modern Critical Views*, 129-46. New York: Chelsea House Publishers, 1986.
- Morgan, Susan. "The Promise of Mansfield Park." In *Jane Austen's Mansfield Park*, edited by Harold Bloom. 57-81. New York: Chelsea House Publishers, 1987.
- Tave, Stuart. "Propriety and Lover's Vows." In *Jane Austen's Mansfield Park*, edited by Harold Bloom. 37-46. New York: Chelsea House Publishers, 1987.